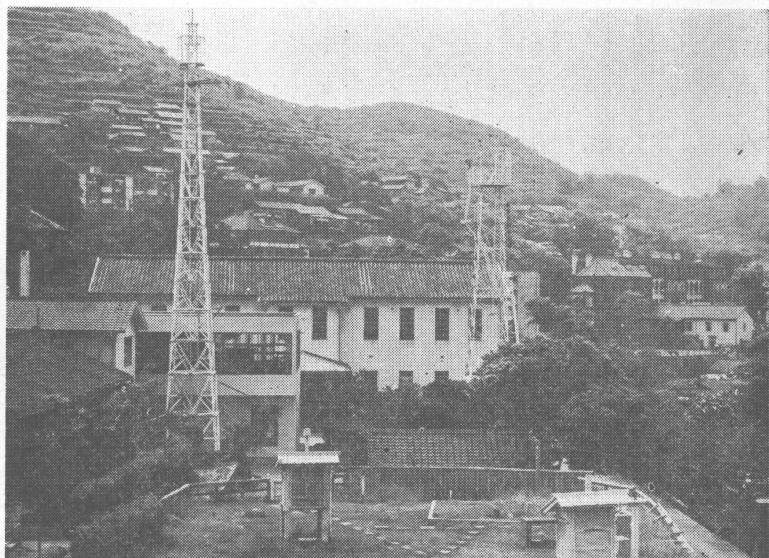


地方だより



長崎海洋気象台

長崎海洋気象台全景（古川氏撮影）

観光バスに乗るとやがて大浦天守堂を経て、小高い丘の上にある古風な外人邸へ案内される。“お蝶夫人”ゆかりの地グラバー邸である。海洋気象台はこのすぐ下にある。長崎は気象についてもゆかりの地である。文政年間市内出島のオランダ館で外人によって気象観測が始められ、明治4年にはオランダ人ヘルツ医師によって、市内小島郷で定時観測が行われたと伝えられる。またヘルツは香港、上海の友人と電信によって気象を交換し合ったと云う。本邦で行われた気象通報の最初かも知れない。

明治11年正戸豹之助によって長崎測候所開設の準備が進められ、同年7月正規に観測を開始した。明治19年には厳原測候所が設立され、長崎県は気象観測の最先端として重要視された。大正13年には更に富江、温泉岳の附属測候所が設置された。昭和6年には長崎、上海間の連絡船に測候所員が便乗し、東シナ海の海洋、海上気象の観測を行なっている。東洋気象台発足のきざしもこの時からあったのかもしれない。昭和20年8月9日の原爆は、中心から5キロ離れた測候所にも多大の被害を与えた。所員は負傷し、庁舎の柱は折れ、地震計は使用不能なまでに傷つけられた。終戦直後、藤原台長は海洋気象台設立のため来崎された。当時の事として自動車もなく、

石畳の道を2キロ離れた県庁まで歩かれ奔走された。当時佐世保にするか長崎にするかの2案があった。その時案内した筆者には台長はかたく長崎案を持っておられたように感じられた。こうして長崎海洋気象台は生れ、測候所業務は吸収された。気象台に対する県市民の期待も大きかった。台長職員もよくこれにこたえ、多くの研究調査が行なわれて来た。海洋観測も当初は細々とやっていたが昭和35年専属の観測船長風丸竣工と同時に観測も本格化し、軌道に乗って来た。海況旬報は漁業者に重宝がられ、海上予報もその応答にいとまがない位である。地上関係も県内に、厳原、福江、平戸、佐世保、温泉岳と5つの測候所があり、大村には航空と通報所をかけた空港気象通報所がある。近く離島へのローカル便が開始されようとし、陸、海、空を受け持つ長崎もまた益々多忙である。庁舎は旧軍の建物だけに、ふ朽もはなはだしく、構内の片すみには軍馬をつないだ柵が、物干場に転じて名残をとどめている。しかし本年3月現業室が新築され、玄関にその威容を誇っている。ここからは港が一目に見え、坂の長崎の夜景はまた格別である。

今回はこれまでのあらましを記すにとどめた。今後は各課から詳細な“たより”が送られよう。

（中島満 記）